

大学生の親の養育態度の認識が養護性に及ぼす影響

古川, 詩織
九州大学大学院人間環境学府

井上, 久美子
西南学院大学

<https://doi.org/10.15017/7347412>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 16, pp.3-9, 2025-03-14. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



大学生の親の養育態度の認識が養護性に及ぼす影響

古川詩織 九州大学大学院人間環境学府 / 井上久美子 西南学院大学

要約

本研究の目的は、大学生を対象に、親の養育態度が内的作業モデルを介して養護性に及ぼす影響について検討することであった。その結果、親の養育態度を肯定的に評価するほど、内的作業モデルにおける“回避”が低くなり、養護性が高くなること、また、親の養育態度を否定的に評価するほど、内的作業モデルにおける“不安”が高くなり、養護性が低くなることが分かった。しかしながら、変数同士の関連はあまり強くなかった。親の養育態度における“肯定的応答性”や“意思の尊重”の認識と、養護性における“共感性”や“準備性”との関連が見られたほか、内的作業モデルがそれらを媒介することが部分的に示唆されたと考えられた。親から受けた養育を肯定的に評価すると、他者との親密な関係性を構築することを避けることなく、子どもに対しても高い共感性や技能を発揮するようになる。その一方、親から否定的な養育を受けることで、自分は見捨てられるのではと不安を募らせ、子どもに対する共感性や技能の認知は低くなると推測される。

キーワード：養育態度、内的作業モデル、養護性

問題と目的

養護性 (nurturance) について、小嶋 (1989) は「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義している。養護性には、①生涯を通して発達するものである、②様々な対象に対して行いうる、③相手を慈しみ育てるという3つの特徴がある (小嶋, 1989)。榎澤ら (2009) は、大学生への質問紙調査から、男女ともに父・母からの被養護体験を認識しているほど、子どもに対する「共感性」や親になりたいといった「準備性」が高まることを示した。このことから、親からの被養護体験を認識していることが、子どもを慈しみ育てようとする態度や行動につながる可能性が考えられる。ところで現在、日本における子ども虐待は増加傾向にある (厚生労働省, 2022)。虐待の一つの要因として、世代間連鎖が考えられている (西澤, 2018)。西澤 (2018) では、世代間連鎖とは、「虐待を受けた子どもが成長し、自身の子どもに虐待を行うという現象」と定義されている。世代間連鎖を防ぐうえで、親から受けた養育のあり方が、自身が子どもと共感的に関わることや、子どもを育てられるだろうという自信にどれほど影響を及ぼすかを検討することは重要であると考えられる。そこで、本研究では大学生を対象に親の養育態度の認識と養護性との関連について検討を行う。対象者を大学生に限定することについては、榎澤ら (2009) が指摘するように、養護性の趣旨からも、ある程度自己形成がなされた段階である青年期に養護性を測定し、その養護性に影響する要因を検討することには意義があると考えられる。また、虐待の世代間連鎖を防ぐうえでも、まだ子育ての経験を持たない大学生を対象に、親の養育態度と養護性との関連について検討する意義はあると考えられる。

親の養育態度および養護性と関連する研究として、アタッチメントにおける内的作業モデルに関する研究がある。Bowlby (1973) は、人は重要な他者との繰り返しの相互作用の中から、自分や他者あるいはそれらを取り巻く環境についての一般的・抽象的な規則を抽出し、内的作業モデルと呼ばれる心的表象を形成していくと説明している。なお、内的作業モデルは「自分は愛される価値のある人間か」という見捨てられ“不安”を反映したモデルと、「他者は自分を助けてくれるか、信頼できるか」という親密性の“回避”を反映したモデルの2つで構成されている (鳥, 2014)。親の養育態度と内的作業モデルについ

て、鳥 (2014) は、親の養育態度が過保護であると認知しているほど見捨てられ“不安”が高く、ケアを受けたという認知が低いほど親密性の“回避”が高くなると示している。親の養育態度を測定する尺度としては、竹内・鈴木・北村 (1989) らが邦訳した、親の行動・態度から親とのきずなを評価する尺度 (Parental Bonding Instrument ; PBI) がよく用いられる。しかし、本研究では、伊藤ら (2014) の肯定的・否定的養育行動尺度を用いる。この尺度は、親の養育行動について“関与・見守り”、“肯定的応答性”、“意思の尊重”、“過干渉”、“非一貫性”、“厳しい叱責・体罰”の6つの下位因子と、これらを説明する二次因子として“肯定的養育”と“否定的養育”の2つの因子を想定しており、従来の尺度よりも親の養育行動を包括的に評価しうる尺度となっている。先に述べた竹内ら (1989) のPBIと伊藤ら (2014) の肯定的・否定的養育行動尺度を比較すると、PBIにおける“ケア”には、“肯定的応答性”、“意思の尊重”、“関与・見守り”における“関与”と類似する項目は含まれているが、“関与・見守り”における“見守り”の要素がない。PBIにおける“過保護”には、“過干渉”は含まれているが、“非一貫性”、“厳しい叱責・体罰”の項目がない。こうした要素の違いをふまえて、本研究では、親の養育態度を肯定的に評価するほど、“不安”や“回避”が低くなり、親の養育態度を否定的に評価するほど、“不安”や“回避”が高くなるのではないかと考える。

内的作業モデルと養護性の関連に関する研究は少ないが、大浦ら (2020) は、愛着の内的作業モデルを媒介変数として、被虐待経験が“不安”・“回避”を高め、他者指向的な共感性を低下させると指摘している。また、Feeney & Collins (2001) は、“回避”が高いほど、他者にサポートを提供しないことを示している。このことから、内的作業モデルにおける“不安”や“回避”が高いほど、養護性は低くなる可能性が考えられる。

過去に親から受けた養育態度の認識と、現在の内的作業モデルの関連について、遠藤 (1992) は、愛着研究において内的作業モデルを仮定することで、早期の愛着経験が個人に内在化され、それがその後の対人関係のモデルとして一貫した機能を果たし続けると説明している。また、鳥 (2014) においても、社会・人格領域の研究では、過去の経験によって現在の個人特性が構成されるという仮定があると指摘している。このことから、

本研究でも同様に、過去に親から受けた養育態度の認識が、現在の内的作業モデルにも反映されると仮定する。以上のことから、本研究では、大学生を対象に親の養育態度の認識が内的作業モデルを媒介して、どのように養護性に影響を及ぼすか検討することを目的とする。

本研究の仮説は以下の通りである。

- ① 親の養育態度を肯定的に評価するほど、内的作業モデルにおける“不安”と“回避”が低くなり、養護性が高くなる。
- ② 親の養育態度を否定的に評価するほど、内的作業モデルにおける“不安”と“回避”が高くなり、養護性が低くなる。

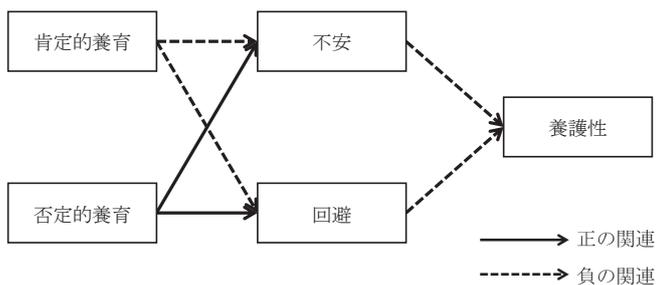


図1 本研究のモデル図

方法

調査対象者

4年制大学1校に在籍する大学生を対象に質問紙調査を実施した。そのうち、記入漏れのない101名（男性24名、女性77名）のデータを分析対象とした。平均年齢は、18.84歳（SD=1.10）であった。

調査内容

親の養育態度 肯定的・否定的養育行動尺度（伊藤ら，2014）を使用した。肯定的養育として「関与・見守り」「肯定的応答性」「意思の尊重」、否定的養育として「過干渉」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」の計6因子で構成されており、全35項目であった。本尺度は保護者の評定により自身の養育態度を測定するものであったが、本研究では調査対象者が親の養育態度を評価するため、例えば「親はあなたが何かをしてくれた時に、ありがとうと言った」のように子ども側の視点に変更して用いた。また、本研究では調査対象者が高校生のころまでを振り返って親の養育態度を評定したが、そのうえで不適切であると考えた7項目を除いた。「全く当てはまらない=1」から「とても当てはまる=5」までの5件法で回答を求めた。

内的作業モデル 一般他者版の親密な対人関係尺度（中尾・加藤，2004）を用いた。本尺度は、「見捨てられ不安」「親密性の回避」の2因子で構成されており、全30項目であった。島（2014）を参考に、因子負荷の高かった各10項目を抜粋した。「全く当てはまらない=1」から「とても当てはまる=5」までの5件法で回答を求めた。

養護性 養護性尺度（糊澤ら，2009）を使用した。本尺度は、「共感性」「技能」「準備性」「非受容性」の4因子で構成されており、全25項目であった。本研究では、親子関係を通しての養護性の発達について検討するため、養護性の対象を子どもに限定したうえで尋ねた。「全く当てはまらない=1」から「とても

当てはまる=5」までの5件法で回答を求めた。

調査手続き

質問紙を配布し、調査の説明を行った後、質問紙に回答してもらった。事前の説明では、データは統計的に処理し、プライバシーの保護に十分に注意を払うこと、調査への協力はあること、質問紙への回答をもって調査協力を同意したものとすることを伝えた。

倫理的配慮

質問紙に回答してもらう前に、倫理的配慮について以下の①～⑤を口頭と書面で説明した。①調査への協力は任意であること。②参加しない場合にも不利益は生じないこと。③質問紙への回答をもって調査協力を同意したものとすること。④回答内容は統計的に処理し、研究以外の目的では使用されないこと。⑤使用後のデータは安全に破棄されること。

結果

肯定的・否定的養育行動尺度の検討

最尤法による確認的因子分析を行った。伊藤ら（2014）では、肯定的養育として「関与・見守り」7項目、否定的養育として「過干渉」4項目が採用されていたが、因子分析の結果、いずれの項目も因子負荷量が低く、各因子の α 係数も低い値となったため、計11項目はすべて削除した。さらに、1つの因子に0.35以下の因子負荷量を示す2項目を削除し、15項目で4因子を抽出した。伊藤ら（2014）にならい、順に「肯定的応答性」「意思の尊重」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」とした。 α 係数はそれぞれ、 $\alpha=.87$ 、 $\alpha=.78$ 、 $\alpha=.85$ 、 $\alpha=.84$ であった（表1）。適合度は、 $\chi^2(85)=238.47$ ($p<0.01$)、GFI=.79、AGFI=.69、CFI=.82、RMSEA=.13であった。十分にモデルと適合しているとは言い難いが、2因子を削除することで、ほか4因子の適合度はやや高まり、 α 係数もおおむね高い値になったため、この4因子モデルとして採択できる水準のものとして判断した。

一般他者版の親密な対人関係尺度の検討

最尤法による確認的因子分析を行った。中尾・加藤（2004）で採用されていた「見捨てられ不安」「親密性の回避」の2因子を想定し、モデルの適合度が十分であると判断できるまで、因子負荷量が低い項目から削除していった。7項目が削除され、13項目で2因子を抽出した。中尾・加藤（2004）らと同様に、「見捨てられ不安」（以下「不安」）、「親密性の回避」（以下「回避」）とした。 α 係数はそれぞれ、 $\alpha=.86$ 、 $\alpha=.84$ であった（表2）。適合度は、 $\chi^2(65)=105.95$ ($p<0.01$)、GFI=.87、AGFI=.81、CFI=.92、RMSEA=.08で、十分にモデルと適合していると判断した。

養護性尺度の検討

最尤法による確認的因子分析を行った。糊澤ら（2009）に基づき4因子モデルを想定し、1つの因子に0.35以下の因子負荷量を示す2項目を削除し、23項目で4因子を抽出した。糊澤ら（2009）にならって、「幼い子どもに対する共感性」（以下「共感性」）、「幼い子どもに対する技能の認知」（以下「技能」）、「親への準備性」（以下「準備性」）、「子どもの非受容性」（以下「非受

表1 肯定的・否定的養育行動尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量				h^2
	1	2	3	4	
第1因子：肯定的応答性 ($\alpha=.87$)					
親はあなたが何かうまくできた時には、褒めた	.93				.86
親はあなたが喜んでいる時には、一緒になって喜んだ	.84				.70
親はおもしろいことをあなたと一緒に笑った	.74				.55
親はあなたが何かをしてくれた時に、ありがとうと言った	.63				.40
第2因子：意思の尊重 ($\alpha=.78$)					
親はできるだけあなた自身の意思を尊重した		.85			.73
親は自分の都合よりも、あなたの考えを優先した		.74			.54
親は失敗することが分かっているにもかかわらず、あなたのやりたいようにさせた		.66			.44
第3因子：非一貫性 ($\alpha=.85$)					
親はあなたを叱ったり褒めたりする基準が、その時の気分で左右されていた			.86		.75
親はあなたへの叱り方が、気分によって変わった			.83		.69
親は個人的なイライラをあなたにぶつける時があった			.74		.55
第4因子：厳しい叱責・体罰 ($\alpha=.84$)					
親はあなたに対して、乱暴な言葉遣いになった				.75	.56
親はあなたに対して、長時間説教をしたり、文句を言い続けた				.74	.55
親はしつこくして、あなたの頭や体をたたくことがあった				.71	.51
親はちょっとしたことで口やかましくなった				.70	.49
親はあなたが悪いことをしたときには、大声で怒鳴った				.70	.49
	因子間相関	1	2	3	4
		—	.58	-.21	-.28
			—	-.35	-.45
				—	.72

表2 一般他者版の親密な対人関係尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量		h^2
	1	2	
第1因子：見捨てられ不安 ($\alpha=.86$)			
私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している	.87		.76
私は、見捨てられるのではないかと心配だ	.85		.73
私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している	.70		.49
* 私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない	.63		.39
私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する	.63		.40
私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する	.58		.34
第2因子：親密性の回避 ($\alpha=.84$)			
* 私は、人の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない		.78	.61
* 私は、人に何でも話す		.73	.53
* 私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない		.65	.42
私は人に心を開くのに抵抗を感じる		.64	.41
* 私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う		.63	.39
心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない		.62	.39
* 私は、人と親密になることがとてもこちよ		.55	.31
	因子間相関	1	2
		—	.01
			—

*は逆転項目

容性)」とした。 α 係数はそれぞれ、 $\alpha=.92$, $\alpha=.94$, $\alpha=.89$, $\alpha=.86$ であった(表3)。適合度は、 $\chi^2(230)=735.40$ ($p<.01$), $GFI=.65$, $AGFI=.58$, $CFI=.76$, $RMSEA=.15$ で、十分にモデルと適合しているとは言い難い。しかしながら、どの項目においても良好な因子負荷量が認められ、 α 係数も高く、この4因子モデルとして採択できると判断した。

各変数の関連

各尺度の単純相関を求め、表4に示した。親の養育態度における「肯定的応答性」は「共感性」、「準備性」、「非受容性」と弱い正の相関がみられた。「意思の尊重」は「回避」と弱い負の、「共感性」、「準備性」、「非受容性」と弱い正の相関がみられた。「非一貫性」は「不安」と弱い正の相関がみられた。「厳しい叱責・体罰」は、「不安」との弱い正の相関がみられた。

続いて、親の養育態度と養護性の直接の関連を調べるために、「不安」と「回避」を統制した偏相関分析を行ったところ、「肯定的応答性」と「非受容性」との相関、「意思の尊重」と「共感性」、「非受容性」との相関が有意ではなくなった。このことから、親の養育態度の認知と養護性との関連は内的作業モデルに

よって部分的に媒介されていることが示唆された。加えて、「肯定的応答性」と「意思の尊重」を「肯定的養育」、「非一貫性」と「厳しい叱責・体罰」を「否定的養育」、「共感性」「技能」「準備性」「非受容性」を「養護性」として相関分析を行った結果を示す(表5)。「肯定的養育」は「回避」と負の、「養護性」と弱い正の相関がみられた。「否定的養育」は「不安」と弱い正の相関がみられた。さらに、「不安」、「回避」と「養護性」にはいずれも弱い負の相関がみられた。

親の養育態度、内的作業モデル、養護性に関するパス解析

パス解析を行う上で、伊藤ら(2014)を参考に、本研究の仮説に沿うように、親の養育態度における「肯定的応答性」と「意思の尊重」の下位因子を「肯定的養育」、「非一貫性」と「厳しい叱責・体罰」の下位因子を「否定的養育」と統合して分析を行った。さらに、養護性についても、糊澤ら(2009)を参考に、本研究の仮説に沿うように、4つの下位因子「共感性」「技能」「準備性」「非受容性」を統合し「養護性」として分析を行った。

親の養育態度を肯定的に評価するほど、内的作業モデルにおける「不安」と「回避」が低くなり、養護性は高くなる、また、

表3 養護性尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量				h^2
	1	2	3	4	
第1因子：幼い子どもに対する共感性 ($\alpha=.92$)					
子どもが遊んでいるのを見てると楽しくなる	.89				.79
子どもが好きな方だと思う	.83				.68
小さい子どもを見ると自分も笑顔になっている	.77				.60
幼児の姿をみかけるとつい目で追ってしまう	.76				.58
幼い子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う	.76				.58
子どもが不安そうな顔をしているときは、不安を取り除いてあげたい	.75				.56
テレビに小さい子どもが出てくると興味を持ってみる	.74				.54
幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.70				.49
第2因子：幼い子どもに対する技能の認知 ($\alpha=.94$)					
幼い子どもの話し相手になれると思う		.88			.77
赤ん坊をあやすのがうまいと思う		.87			.76
幼い子どもをあきさせないで30分以上遊ばせることができる		.87			.75
幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる		.86			.75
幼い子どもの世話には自信がある		.85			.73
大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる		.83			.70
今すぐにでも幼稚園の教諭をやっていけそうな気がする		.71			.51
第3因子：親への準備性 ($\alpha=.89$)					
できれば自分も親になって子どもを育てようと思う			.95		.90
自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている			.95		.89
将来、子どもをうまく育てられると思う			.72		.52
自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする			.62		.39
第4因子：子どもの非受容性 ($\alpha=.86$)					
* 幼い子どもはあまり好きになれない				.93	.87
* 小さい子どもを見ても別にかわいいと感じない				.78	.61
* 幼児の遊び相手になる自信はない				.73	.53
* 子どもがわがままなことをいっているのを見るとたたくたかくなると思う				.70	.49
因子間相関	1	-	.70	.58	.81
	2	-	-	.56	.75
	3	-	-	-	.60

*は逆転項目

表4 変数の記述統計量と変数間の相関

尺度	平均	SD	肯定的養育		否定的養育		内的作業モデル			養護性		
			1 肯定的 応答性	2 意思の 尊重	3 非一貫性	4 厳しい 叱責・ 体罰	5 不安	6 回避	7 共感性	8 技能	9 準備性	10 非受容性
1 肯定的応答性	2.71	0.90	-	.58 **	-.21 *	-.28 **	-.01	-.16	.20 +	.08	.22 *	.18 +
2 意思の尊重	4.19	0.70		-	-.35 **	-.45 **	-.08	-.20 *	.19 +	.16	.28 **	.18 +
3 非一貫性	4.09	0.70			-	.72 **	.33 **	.04	-.04	.00	-.08	-.06
4 厳しい叱責・体罰	3.81	0.75				-	.18 +	.04	-.08	.05	-.05	-.11
5 不安	2.76	0.81					-	.01	-.13	-.27 **	-.24 *	-.27 **
6 回避	2.79	0.76						-	-.21 *	-.23 *	-.19 +	-.21 *
7 共感性	2.89	0.73	.17 +	.15	.01	-.05			-	.70 **	.58 **	.81 **
8 技能	3.92	0.88	.05	.10	.11	.11				-	.56 **	.75 **
9 準備性	2.76	0.35	.20 *	.24 *	.00	-.01					-	.60 **
10 非受容性	3.29	1.14	.16	.13	.04	-.06						-

注) 右上半分の数値は単純相関係数、左下半分のイタリックの数値は“不安”と“回避”を統制した偏相関係数である。

** p<.01, * p<.05, + p<.10

表5 変数を統合した場合の変数間の相関

尺度	肯定的養育	否定的養育	不安	回避	養護性
肯定的養育	-	-.40 **	-.05	-.20 *	.23 *
否定的養育		-	.26 **	.04	-.05
不安			-	.01	-.25 *
回避				-	-.24 *
養護性					-

** p<.01, * p<.05, + p<.10

親の養育態度を否定的に評価するほど、内的作業モデルにおける“不安”と“回避”が高くなり、養護性は低くなると仮定し、パス解析を行った。その結果、適合度は、 $\chi^2(3)=4.773$ ($p<.05$), CFI=.91, TLI=.74, RMSEA=.08 (90%CI [.00, .20], SRMR=.04となり、データに対するモデルの当てはまりはおおむね十分であると判断された(図2)。図2より、親の養育態度を肯定的に評価するほど、“回避”が低く、“不安”が低いほど、“養護性”は高いことが示された。親の養育態度を否定的に評価するほど、“不安”が高く、“不安”が高いほど、“養護性”は低いことが示された。

考察

本研究では、大学生を対象に親の養育態度の認識が内的作業モデルを媒介して、どのように養護性に影響を及ぼすのか検討した。仮説①親の養育態度を肯定的に評価するほど、内的作業

モデルにおける“不安”と“回避”が低くなり、養護性が高くなる、については、親の養育態度を肯定的に認知しているほど、内的作業モデルにおける“回避”のみが低くなり、養護性が高くなった。仮説②親の養育態度を否定的に評価するほど、内的作業モデルにおける“不安”と“回避”が高くなり、養護性が低くなる、については、親の養育態度を否定的に認知しているほど、内的作業モデルにおける“不安”のみが高くなり、養護性は低くなった。しかしながら、変数間の相関係数や各変数の重決定係数が示すように、変数同士の関連は強くないことが示された。

まず、親の養育態度の認識と内的作業モデルの関連については、親の養育態度を肯定的に評価するほど、“回避”が低く、否定的に評価するほど、“不安”が高いことが示された。鳥(2014)によると、親から肯定的な養育を指す“ケア”を受けたという認知が低いほど、“回避”が高く、否定的な養育を指す“過保護”であると認知するほど“不安”が高くなるとされる。肯定的養育が“回避”を低めるという結果は、この先行研究と同様であった。肯定的養育によって親子間で親密な関係が築かれ、他者との親密な関係も回避しないと考えられる。また、否定的養育が“不安”を高めるという結果も、この先行研究と同様であった。しかし、この先行研究における“過保護”と類似する“過干渉”の項目を、因子分析の結果、本研究では削除している。そのため、本研究における“否定的養育”(“非一貫性”“厳しい叱責・体罰”)と先行研究における否定的養育とが必ずしも合致するとは言えない。しかしながら、大浦ら(2020)では、被虐待経験

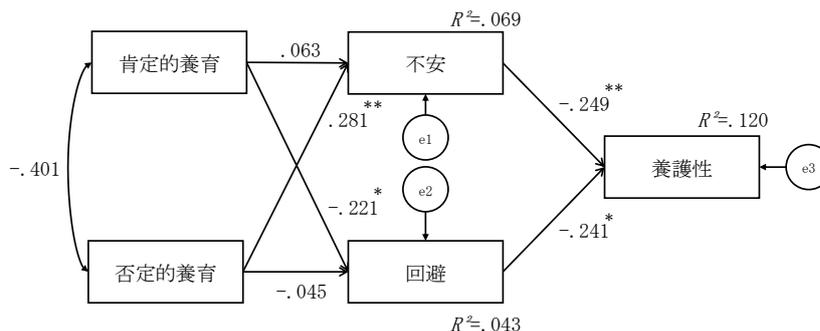


図2 パス解析の結果

が“不安”を高めるということが示されている。被虐待経験の中でも特に身体的虐待は、否定的養育における“厳しい叱責・体罰”と類似する項目である。そのため、本研究における“否定的養育”を受けたと認知する大学生が、“不安”を高く感じる結果につながった可能性が考えられる。つまり、親から厳しい叱責や体罰を受けたという認識を持っていることが、現在の重要な他者との関係において自分を受け入れてもらえないのではないかという“不安”につながる可能性が示唆されたと言える。

次に、内的作業モデルによる媒介効果について検討するために、親の養育態度の認識、内的作業モデル、養護性の関連について整理する。親の養育態度の認識と養護性は、偏相関係数の値からも分かるように、“肯定的応答性”が“共感性”、“準備性”と弱い正の相関、“意思の尊重”が“準備性”と弱い正の相関を示したのみであった。これは、榎澤ら(2009)による先行研究と一致している。内的作業モデルと養護性については、“不安”と“共感性”以外はすべて弱い負の相関がみられた。そのため、今回のモデルから分かるように、親の養育態度と養護性の関連において、内的作業モデルがそれらを媒介することが部分的に示唆されたと考えられる。親から受けた養育を肯定的に評価すると、他者との親密な関係性を構築することを避けることなく、子どもへの共感性や受容が高まり、子どもと関わる技能を高く評価し、親への準備性も高まると推測される。その一方、親から否定的な養育を受けることで、自分は見捨てられるのではと不安を募らせ、子どもと関わる技能を低く評価し、親への準備性が低くなるほか、子どもにも非受容的になると推測される。そして、内的作業モデルがそれらを媒介することが部分的に示唆されたと考えられる。親から受けた養育を肯定的に評価すると、他者との親密な関係性を構築することを避けることなく、子どもに対しても高い共感性や技能を発揮するようになる。その一方、親から否定的な養育を受けることで、自分は見捨てられるのではと不安を募らせ、子どもに対する共感性や技能の認知は低くなると推測される。

最後に、本研究の課題として、親の養育態度を測定する尺度に関する問題が挙げられる。本研究では、因子負荷量が低く、各因子の α 係数も低い値となったため、肯定的養育の“関与・見守り”と、否定的養育の“過干渉”をすべて削除した。この2因子は類似した項目も多く、例えば「修学旅行などで離れる間、親はあなたのことをいつも増して心配した」という項目は、肯定的養育であるとも、否定的養育であるとも捉えられうる。内的作業モデルによる媒介効果を検討するうえでも、特に否定的養育については、より適切な下位因子を検討する必要がある。

加えて、今回の調査対象となった大学生の多くが、養護性を学ぶ機会のある学科に所属していた。そのような学生の学びの傾向が本調査の回答に影響を与えた可能性がある。そのため、今後は様々な学部所属する大学生を対象とした調査を実施する必要がある。

また、本研究では、親の養育態度の認識が、自身の内的作業モデルに影響を与え、子どもに対する養護性にも影響を及ぼすことが示唆された。しかしながら、「一般的な子どもに対する養護性」から「自分の子どもに対する養護性」への連続性の検討も必要と考えられる。Main et al (1985)やBowlby (1973)は、親子の愛着形成が子どもの内的作業モデルに及ぼす影響について実証的に研究しているが、あくまで推定されたものであり、因果の方向性については依然不明瞭なところがあると述べている。そのため、一般的な子どもに対する養護性が、自身の子どもに対しても同様に発揮されるかは今後検討する必要がある。

〈付記〉

本研究の調査にご協力いただいた大学生の方々へ心より御礼申し上げます。また、本稿執筆にあたりご指導いただいた九州大学大学院人間環境学研究院准教授の小澤永治先生へ心より御礼申し上げます。

文献

- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2. Separation*. New York: Basic Books.
- 遠藤利彦 (1992). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220.
- Feeney, B. C., & Collins, N.L. (2001). Predictors of caregiving in adult intimate relationships: An attachment theoretical perspective. *Journal of personality and Social Psychology*, 80, 972-994.
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次 (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証. 発達心理学研究, 25 (3), 221-231.
- 川端一光・岩間徳兼・鈴木雅之 (2018). Rによる多変量解析入門. データ分析の実戦と理論. オーム社.
- 小嶋秀夫 (1989). 養護性の発達とその意味. 小嶋秀夫 (編). 乳幼児の社会的世界 (pp.187-204). 有斐閣.
- 厚生労働省 (2022). 令和4年版厚生労働白書 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/21/dl/zentai.pdf>
- 榎澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響. 教育心理学研究, 57 (2), 168-179.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の研究. 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 西澤哲 (2018). 子ども虐待における加害と被害の世代間連鎖と世代内連鎖. 臨床心理学, 18 (5), 542-546.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2020). 被虐待経験は本当に共感性を低下させるのか?—愛着の内的作業モデルを媒介変数として—. *Journal of Health Psychology Research*, 32, 127-134.
- 島義弘 (2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか: 内的作業モデルの媒介効果. 発達心理学研究, 25 (3), 260-267.
- 竹内美香・鈴木忠治・北村俊則 (1989). 両親の養育態度に関する因子分析的研究. 周産期医学, 19, 852-856.

Examining effects of parental attitudes on nurturance through internal working models in university students

Shiori FURUKAWA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Kumiko INOUE

Seinan Gakuin University

Nurturance is defined as “empathy and skills used to promote the healthy development of others.” This study examined the effects of parental attitudes on nurturance through internal working models among university students. The findings indicated that a more positive parental attitude is associated with lower “Avoidance” in internal working models, and higher levels of nurturance. Conversely, a more negative parental attitude correlated with higher “Anxiety” in internal working models and lower nurturance. However, the correlation between these variables was not strong. There is some indication that parental attitudes are particularly related to the “empathy” component of nurturance. Possibly mediated by internal working models. Evaluating parental attitudes as positive may lead to greater empathy and nurturing skills toward children, without avoiding development of close relationships with others. On the other hand, negative parental attitudes may heighten anxiety about abandonment, thereby leading to lower perceptions of empathy and nurturing skills toward children.

Keywords: parental attitudes, internal working model, nurturance